あの日の父の歩みのように

蝙蝠傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の父の歩みのように

【Ｎコード】

Ｎ４３０５Ｆ

【作者名】

蝙蝠傘

【あらすじ】

足が悪い父が大嫌いだった幼い頃の葉子。両親が離婚してからも父を思い出すこともなかった。そんな少女が小学校の教師となって出会ったのが父のように足の悪い慎二だった。

序（前書き）

短い話ですから気楽に読んで下さい。

序

電車がガタンゴトンと通過していく線路ぞいの道を、鮫島葉子（さめじまようこ）は一人で歩いていた。

夏になりかけの日差しは、薄い雲に吸い取られ、どんよりとした空は葉子の心の中を映しているようだった。それでも木々の梢は、微かな光を煌かせ、ただただ風に吹かれていた。

過ぎ去る電車を見ながら、父の所に向かう葉子の長くのびた足は、風が吹けば今にもくずれ落ちそうなほど儚く写った。すれ違う人々はそんな葉子に、憐憫の表情を浮かべ、道を譲って通り過ぎて行った。

この道の先にある父の家までの短い距離が、今まで歩いて来た26年間の全ての距離より、遥かに遠く感じる葉子だった。

ここが父の住む町なのだ。葉子の歩みは今にも止まりそうに遅かった。

まるであの時の父の歩みのように。

序（後書き）

短期に集中して連載します。
感想などありましたらどしどしお願いします。

父が嫌いだった

1

葉子の小学校の入学式の日、桜はほとんど散っていた。校門の前の葉桜の下で、片桐二郎（かたぎりじろう）は葉子と母が出てくるのを桜の木に隠れるように待っていた。

「お父さんは来ないでね」葉子がそう言ったからだ。

「どうして？」父はほっぺたを河豚のようにふくらまして葉子を見た。葉子はそんな父の顔を見ることなく母の後ろに隠れてしまった。二郎は苦笑いしてそれ以上何もを言わなかった。それでも葉子の小学校の入学式を見たい気持ちが二郎を小学校まで足を運ばせた。

入学式が終わってから、着飾った人々が小さな新入生の手を引いて帰って行く。母は近所の顔見知りの人々と談笑していた。校門近くで、父が友達とふざけて遊ぶ葉子を見つけた。二郎は声をかけるつもりはなかった。ただその時、葉子が父の方を向いて笑ったように感じた。とっさに「葉子！」と大きな声で呼びながら、杖に支えられて左足に右足を引き寄せるようにして一歩前に歩き出した。その時葉子に向かって「お前の父ちゃんか、あれ！」男友達の鉄平（てっぺい）が父を指さして何気なく言った一言だった。

葉子の水のよう冷たかった父への思いは、その時一瞬にして凍ってしまった。それも心の中の奥深くで、決して溶けることのない永久凍土のように。

「やめて！」葉子は泣きそうな気持ちをおさえ、父には目もくれず一目散で母の所まで走っていった。それを見て二郎は、後悔の重い足を引きずりながら、人目を避けるように一人で帰っていった。左足を出して、地面をこするように右足を引き寄せながら。

（足の悪い父親がそんなに恥ずかしいのか・・・・）そんな思いが胸を突いても、自分から逃げていく葉子を黙って見ているしか二郎には出来なかった。それが二郎の親としての葉子への接し方だった。

そんな事があって小学校に入った頃の葉子はあまり学校に生きたがらなかった。「お前の父ちゃん、かかし！」鉄平が葉子をからかうからだ。

「お父さんは病気で死んじゃったわ」と葉子は嘘をついた。

「うそつきは泥棒の始まりなんだぞ」鉄平が地面をこするように左足に右足を引き寄せる葉子の父の真似をしながら笑っていた。

「本当のお父さんは死んじゃったの」葉子はさらに嘘を続けた。

「うそついたら閻魔さんに舌抜かれるぞ」しつこく父の真似を止めない鉄平が葉子には本当の父の姿のように見えてきた。

「鉄平なんか嫌い！」そう叫ぶと葉子は泣きながら鉄平から走り去って行った。それは父から去って行くのと同じだった。

「人の身体の事を決して言っては駄目です。人間として最低なことですよ」教室で先生が皆にそう注意するたびに、葉子の小さな心は逆に傷ついていくのだった。その傷ついた心の中の冷たい闇の中へ父親は消えていった。それは種も仕掛けもなくハンカチの中から鳩が消えてしまうように。

小学三年生頃になると、葉子は父と一緒に歩く時はいつも少し距離をおいて歩いた。それは足を引きずって歩くこの男が、自分の父親だと思われたくない気持ちからだった。杖に支えられて左足が出てから、地面をこするように右足を引き寄せる。父、片桐二郎のじれったい動作に、少し離れて歩く葉子はいらついた。幼い葉子はその気持ちを、時々辛らつな言葉として口に出した。

「さっさと歩いてよ、早く帰って友達と遊ぶんだから」

それでもただ、情けなさそうに笑って「じゃ、走るぞ」と両腕をかまえて、左足に右足を引き寄せる父がいた。葉子が恐い顔してにらむと「先に帰っていいよ」の優しい父の声に、葉子は振り返ることなく、そこから逃げて行くように走っていった。

片桐二郎はそんな葉子のうしろ姿を目で追いながら「もうすぐ葉

子ともお別れだよ」と呟きながら汗を拭く振りをして目頭を押えた。
葉子の母、片桐芳江（かたぎりよしえ）は笑顔の綺麗な人だった。人付き合いがよく、決して美人ではないが、どこか人に好まれるところがあった。葉子はそんな母が好きで自慢だった。ほとんど皆がそうであるように、葉子も小さい時から母にまとわりついて離れなかった。ただ父親には甘える事ができず、母への思いとは反対にその距離も年々遠くなっていった。葉子がまだ幼かった頃に、父親が大きな怪我のために足を引きずるようになってからは父には笑顔すら見せなくなっていた。いつも優しい父なのに、悲しいほど葉子を愛しているのに葉子は父親が大嫌いだった。

その父の記憶も、葉子の小学三年の終わりころで途切れていた。

それは、突然の出来事のように葉子には思えた。
学校からの帰り道。家に帰ったら食べようと、途中のお菓子屋で買ったクリームパンの入った袋を右手に持って、葉子は急いで家まで戻ってきた。ちょうど家の玄関から父親があまり見かけない大きなかばんを持って出てくるところだった。葉子は会いたくないと、家の影に隠れて父が出て行くまで声を殺して待っていた。葉子には決して怒ったことがない、いつも笑顔の優しい父なのに。悲しいほど嫌いな父の姿が見えなくなるまでいつまでも隠れていた。
「葉子ちゃん何してるの」学校帰りの理沙と聖子が声をかけた。葉子は一指し指を口に当てるしぐさをした。理沙と聖子もあわてて葉子の影に隠れた。
「お父さんに怒られたんだ」理沙は息をころして呟いた。聖子は葉子の服を引っ張りながらその服でしきりに顔を隠そうとしている。
「聖子が顔を隠してどうするのさ」理沙が笑った。聖子もはにかんだ。
出てきたのは父だけだった。時間が止まったようなゆっくりした

歩み。風が吹き、垣根がばさばさと音を鳴らした。夕焼けに溶け込むような父親の姿は、この世から消えて行こうとしているように見えた。いつもなら、くしゃみが出そうになっても我慢したはずなのに、犬が吼えて怖くて仕方がない時でも、葉子は泣きそうな顔をして隠れていたのに、この時、葉子の背中を微かな波動が走り抜けていった。葉子はいつもと何かが違うと感じた。

摩訶不思議な親子の情としか思えない。

「ごめんね、あとで公園で遊ぼう」葉子は理沙と聖子にそう言って駆け足で父の所まで行った。

「どこへ行くの。お母さんはいないの。私がついて行こうか」と父に声をかけた。

父は嬉しそうに大きな穴の開くほどに葉子の顔を見つめた。これがこの世の見納めと言わんばかりに。しかし母と別れてこの家を出て行くとは言わなかった。幼い葉子にはその意味すらわからないだろうから。

「いいんだよ、今日は一人で行くよ、遊びに行ったらいい」父は笑顔で葉子の頭に手を置いた。

「うん」葉子は内心助かったと、心の中で舌を出した。

「そうだ、葉子：これ好きだったろう」父は大きなかばんの中から、中野の都コンブを取り出した。

「ありがとう」葉子はそんなに好きでもないと思ったが、喜んでそれを受け取ると反転して家に向かって歩き出した。

家の玄関までは、そんなに距離はなかった。家の中に入ろうとした葉子は、もう一度父を見るため振り返った。右足を引きずりながら歩く父親のうしろ姿が、電信柱の影に隠れて見えなくなろうとしていた。葉子が横を見ると理沙と聖子がまだ隠れるまねをしてこっちを覗き込んでいた。

「後でね」葉子は小さく手を振ると家の中に入っていった。

父は電信柱の影で立ち止まると大きなかばんの中から麦わら帽子を取り出した。葉子に買ってから一度も被られたことがない向日葵

の絵が描いてある麦わら帽子「変な帽子、恥ずかしくてかぶれない」葉子の声がこだましていた。二郎が家から持ち出した唯一、葉子の思い出だった。思い出は一つで十分だった。自分からは2度と葉子とは会わないつもり二郎にとって、それは辛さを増す道具にすぎないからだ。そして、その電信柱の影から再び父が振り向いたときには、見慣れた風景が霞んでいるだけで葉子の姿はすでになかった。

「ただいま！」家の中に入った葉子は、父からもらった中野の都コンブをそのまま無雑作に台所のゴミ箱に捨てると、袋から出したクリームパンをおいしそうに食べた。

「お帰り！」母はいつものように葉子に声をかけた。いつもそうしているように、でもこの日は一言だけ多かった

「お父さんはしばらく帰ってこない、犬のお婆ちゃんの家で暮らすことになったの」母はまるで他人事のように淡々と言った。

犬のお婆ちゃんの家とは、犬を飼っている父の実家のことである。葉子は父が家にいないのが、たまらなく嬉しく大きな声をだして「やった！」と飛び上がった。ただそれだけのことであった。別れの言葉すらかける事なく葉子の前から父はいなくなった。そして、葉子が父の姿を見るのはこの日が最後になるのだろうか。

離婚届け

2

台所の水道の蛇口から、ポタ、ポタと水滴の落ちる音が聞こえる。

「別れよう」静かな空間に二郎の言葉は別に驚きもなく響いていた。心臓の音が聞こえてきそうな程の静寂さは悲しい言葉ですら包み込んでしまう。

「・・・」芳江は黙っていた。

二郎と芳江は台所の椅子に腰掛けていた。そしてテーブルの上には、達筆な毛筆文字で片桐二郎の署名と判子が押してある離婚届けが一枚置いてあった。二人は隣の部屋で、寝息を立てている葉子を気遣いながら静かに話した。

「俺はこの家から出て、病気がちの実家の母の面倒を見るつもりだ。」

二郎が唐突に言った言葉ではない。知らぬ間に出来た二人の小さな溝が月日を重ねる毎に修復できないほどの大きな溝になっていった。身体が満足に動かない二郎を時には疎ましく感じる芳江が苛立ちを抑えながら健気に振舞い続けるには、まだ若く魅力的過ぎたのかも知れない。

ただ時が過ぎ去っていっただけなのに、二郎の辛い思いが分らない芳江ではなかったが、心のどこかでは開放されたい自分がいることを否めなかった。そして二郎への冷めていく気持ちが大きくなるにつれ、結婚以来すっかり忘れていた感情が芳江の胸にほのかに灯っていくのを消す事が出来なかった。

「葉子は・・」覚悟を決めていたのか、芳江はその事には言及しなかった。葉子の親権を確かめておきたかった。

「お前にまかせるしかない」

「でも・・」

「俺は葉子を幸せにしてやれない」二郎は寝ている葉子を見た。

「あなたは・・」
「どうにかなるさ」二郎は笑いながら芳江を見た。こんな時に笑えるのはおそらく二郎ぐらいだろう。あきらめた笑いではない。あきらめたら笑えない。
「私・・」
人生を刻む時計のように、ポタ、ポタと雫の垂れる音が芳江には切なく聞こえた。
「いいんだよ、誰のせいでもない」二郎の言葉には優しさがあった。その優しさが芳江には耐えられなかった。
「私が目さえ離さなければ・・・」それにしても芳江の言葉は短かった。
「いいんだ、それも今日で終わる」
「・・・」芳江は何も言えなかった。

それは葉子が4歳のころ。近くの神社に遊びに行った日の出来事だった。二郎は、芳江と葉子を連れて神社までの長い階段を登りきって、芳江の側で嬉しそうにはしゃぐ葉子を少し離れたところで見ていた。それは帰り際に起こった。
「葉子おいで、そのお土産物屋さんでなんか甘いものでも買ってあげる」との母の声に葉子の笑顔がはじけた。
「ケーキ食べたい！」まだ幼さが残る言葉づかいに母もにっこり笑って葉子の手を引いた。
その土産物屋は階段の近くにあった。一回り見て回った二郎は土産物屋を離れ、二人が買い物をするところを少し離れたベンチに腰かけて見ていた。その時長い階段をゆっくり登って来る老人が目に入った。あと少しのところで老人がつらそうに腰を折って立ち止まっているのを目にすると、二郎はベンチから立ち上がり手を貸そうと階段の上に立ち、今にも降りようと1歩足を前に出した。その瞬間を芳江は土産物屋の清算中に今までいた葉子が側にいない事に気づいて泳がせた視線の片隅で捕らえた。その時、芳江の頭の中は真

新しい画用紙のように真っ白なった。
今まで芳江の側にいたはずの葉子が、父の後ろからぶっつかるように背中を両手で押したのだ。そこに階段があるのを知りながら、その行動の後に何が起こるのかをわからないままに。
芳江の視界から葉子だけを残して二郎は突然その場から姿を消した。
階段を降りようとした父の身体は一旦、宙に浮いてから、もんどり打ってそのまま長い階段を転げ落ちていった。階段の上で突然いなくなった父を探すように呆然と立ちつくす葉子の姿が、落ちていく二郎の目に焼きついた。葉子の回りの人が一斉にざわめいた。訳知らず人々が集まってくる。階段の上で大きな声を張り上げあわてて階段を駆け下りる人が同じように階段を二三段転げ落ちて頭を抱えている。見知らぬ女性が泣いている葉子の身体を抱きしめた。外のあわただしい空気に芳江の絶唱に近い声が響いた。「葉子！」
その声に葉子は振り向きおぼつかない足取りで泣きながら母の所に駆けて来た。
「誰かが階段から落ちた！救急車を呼んでくれ！」騒然とする中、芳江は葉子をお土産物屋に預けてよろけそうになりながらも階段の上に立った。動悸が激しく胸を打った。芳江が階段の上から下を見た時、芳江の目には赤い血だまりの中で小さく横たわる二郎の姿が映った。そして後は何があったのかを芳江はよく覚えていなかった。その赤い血の色以外は。
記憶とは時間と共に霞んでいくものなのにその赤い色だけは時がたてばたつほど鮮やかさが増していった。
土産物屋で買い物をしていた芳江が少し目を放した瞬時の出来事。幼い葉子が父をおどかそうとした行動を誰が責められるだろうか。僅かな段差がもたらした悲しい事故だった。その事故のため二郎の右足は満足に動かなくなってしまったのだ。自分の人生すら満足に動かせないのではないかと錯覚するほどに。

芳江は食卓の離婚届けに手を置いた。
「俺と別れたら、いい人見つけて再婚すればいい。」二郎は芳江を振り向きながら、隣の部屋で寝ている葉子の側に行きその小さな手を握った。
芳江は微かな苛立ちと悲しみを隠すためうつむいたままだった。それは優しい言葉かも知れないが、芳江にとっては冷たく響くだけだった。別れの時には優しさなど迷惑だからだ。
二郎もそれ以上は何も言わなかった。ただ葉子の顔を見つめていた。明日からはこの顔を見ることが出来ないかも知れないと考えると、葉子のその小さな手を握りしめて離す事が出来なかった。唯一、寝ている時は葉子も父から逃げなかった。
二郎は芳江を見た。そのうしろ姿はいかにも寂しげに映った。それは二郎と別れる寂しさでは決してない。別れるのが寂しければ別れはしない。葉子を片親にしてしまう親の身勝手さと、二郎が芳江に対して一言の恨み事も言わない事が腹立たしくて切なかった。芳江に親しい男がいる事を二郎は知っていた。しかしそれは無理もない事だと頭では思っていた。まだ若い芳江に足も満足に動かないお荷物を背負って、これからの人生を生きていけるはずがない事は分っていたからだ。それを許す気持ちは二郎が男として芳江の元を去る事を意味していた。それは同時に葉子からも消えていく事になった。

それは奇跡のように二郎の前に現れた。
或る日の昼下がり、二郎が歩いていた歩道から車道を挟んだ向こうの道で、二郎の視界を霞めていった芳江と若い男。肩を寄せ合いながら抱き合うように歩く二人の姿が交差する車の狭間ではっきり見えた。その二人の姿が脳裏から離れない二郎であった。
「今日どこへ行ったんだ？」その晩、二郎は芳江に聞いた。
「どこへ行ったか：言わなきゃいけないの。」芳江は台所で家事をしながら聞き流していた。

「別に、言いにくい事なら言わなくてもいい」
「言いにくいってどう言う意味・・・」台所で聞こえていたまな板を叩く包丁の音が止んで、その包丁の切っ先よりも冷え冷えとした芳江の声が響いた。
「言いたくない事なら言わなくてもいい」二郎は芳江の心が凍えるような冷たい声に戸惑った。愛がなくなれば人はこうも変われるものなのか・・・。
「言いにくい事も、言いたくない事も別にないわ。あなたに言う事は何もありません」その挑戦的な言葉にそれ以上二郎は何も言わなかった。言っても仕方がないくらい二人の関係は冷めていたのだ。芳江のまな板を叩く包丁の音が再び二郎に聞こえてきた。

しかし、その事で芳江を責める事はなかった。芳江が傷つく事は葉子が傷つくことだった。それを二郎は口に出せなかった。まぎれもなく芳江は葉子が大好きな母なのだから。
「わかったわ」芳江はそう言い終わると離婚届を手元に引き寄せ名前を書いて判子を押した。涙の一筋も流すことなく。

そして次の日に、二郎は葉子に別れも告げず家を出て行ったのだ。中野の都コンブをたった一個、葉子の手の中に残して。二郎にとって思い出のある家を自ら出て行くのは辛かったが、葉子が幸せになる為にはそれしかないとその時は思った。その家にはもうすでに片桐二郎の居場所が無かったのだから。

娘のための選択

3

しかし二郎と離婚した芳江は旧姓の鮫島芳江に戻った後も再婚という道を選択しなかった。結婚して一緒に暮らしたい気持ちがあっても葉子のことを考えると決心できなかった。結婚したい気持ちが熱いほど燃えていたはずなのに、障害が全てなくなった時に、その道を進めなくなる人生の皮肉さに似ていた。それは人として生きていくための芳江の選択だった。芳江が葉子のために選んだ道だった。

夕暮れの街角にそのレストランはあった。蔦の絡まる白壁に、ほのかに影が揺れていた。

薄暗い店内にはキース・ジャレットの美しいピアノが流れていた。

「最高だよ。このピアノ」男は瞑想しながら独り言のように呟いた。

「立花(たちばな)さんって音楽が好きなのですね」芳江は小刻みに身体でリズムとる立花を見ながら、押しつぶされそうなほど小さくなった心の動揺が止まらなかった。

「芳江さんと一緒にいる事に比べれば好きとは言えない」と笑う立花の笑顔を芳江は正視できなかった。

「正確に言うとジャズピアノが好きなんです」立花は小さな会社に勤めるサラリーマンで芳江より少し若かったが、女の噂が途切れたことがない男が見ても惚れるほどのいい男だった。

立花は芳江を見た。

「・・・」芳江は何も言えず目を伏せてしまった。それを待っていたのか、霧雨が瞼(まぶた)を濡らし、閉ざされた心が咽び泣くようにピアノは哀愁を帯びた曲へと変わった。

「ある映画の別れのワンシーンにこのメロディが流れるんだ。切ない別れの時にはこれに限るよ・・・」立花の笑顔が小さくなっていた。

「えっ・・・」芳江はそれ以上声が出なかった。

珈琲カップを持つ芳江の手が微かに震えた。突然、電池が切れたウォークマンみたいにピアノの音がプツッと止んだ。
一瞬の静寂と焦燥。
それでも立花の身体は、消えた音を愛しむように微かにリズムを刻んでいた。何か話さなければと芳江が立花を見た時、立花の動きが止まり、その目は芳江を見つめていた。
「ここはいい店なんだけど、時々音が切れるのが玉に傷なんだ。」
「ほんとね・・」芳江は笑えない。
立花は芳江の心に火をつけようとでもするかのように煙草に火をつけた。白い煙が立ち上って消えていった。
「さっきの映画の続きなんだけど・・去っていく男を見送る女の涙がスクリーンにアップになったところで音楽が突然消えたんだよ。今みたいにさ・・・そしてシーンが変わったら、この二人どうなったと思う？」立花の心に微かに火がついた。
「どうなったの？」芳江が少し微笑んだ。
「賛美歌に包まれて、二人は教会で結婚式を挙げていたんだ」立花は煙草の煙で芳江の顔が隠れないようにそうっと火を消した。
心の火はそのままに「ｍａｒｒｙ　ｍｅ？」立花は小さな声で言うと芳江を見つめた。
「・なんて言ったの？」芳江はこれで終わりにはしたくなかった。
「結婚してくれないか？」立花の心の火は芳江を燃やし尽くしてしまうほどに熱くなっていた。今、初めて聞いた言葉ではなかったが、これが最後になるかも知れない言葉だと芳江は思った。服の上から見ても分かるほど、胸の動悸が止まらない。再び、夕暮れのレストランの中に静かなピアノが流れてきた。まるで二人の気持ちを知り尽くしてでもいるかのように別れにはピッタリの音楽だった。
「選曲のセンスがいいんだ。ここのマスターは」立花は寂しそうに笑い芳江の返答を待った。
「でも、私はバージンロードを歩けない」
「大丈夫だよ、俺、子供好きだし。今でも葉子ちゃんと仲良しなん

だよ・ほら、これだって葉子ちゃんから貰ったんだよ」小さな青い鳥のキーホルダー。「いい事あるよって・」立花の手の中の小さなキーホルダーを芳江は涙に霞んで見えなかった。
「賛美歌も歌えない私・・・結婚はできないの」芳江の声は消えそうだった。
立花はその言葉を聞くと再び煙草に火をつけようとした。しかし心の火が消えたみたいにライターにも火がつかない。
「そうか・この言葉だけは言いたくなかったんだけど・」火のつかない煙草を指で回しながら立花が芳江に向けたのは笑顔だった。
「・・・分かったよ、芳江さん」その笑顔は切ないほど芳江の胸を刺した。
「忘却とは　忘れ去る事なり。　忘れ得ずして　忘却を誓う心の悲しさよ・昔の映画の台詞なんだ」立花は自分の今の気持ちを芳江に伝えたかった。
その時、再び、電池が切れた電動歯ブラシみたいに、ピアノの音がプツッと切れた。
「おーい！新しいステレオ買った方がいいよ」立花はマスターに聞こえるように大声で言った。カウンターの向こうで髭のマスターは笑っていた。

それからでも立花は時間を作って芳江に会いに来ていたが、葉子が中学生になる頃には十歳ほど年の若い女性と結婚してしまった。
「芳江さん、まだ若いうちに再婚しないと、そのうち誰も相手をしてくれなくなりますよ」立花は別れ際に優しく芳江の肩を抱いた。
「そうですね・」立花の肌の温もりにそれだけ言うのが精一杯の芳江だった。
「嘘です。芳江さんは幾つなってもきっと魅力ある女性ですよ。何年たってもバラが美しいように！」ウインクしながら立花は本当に芳江の元から去っていった。立花が雑踏（ざっとう）の中に見えなくなるまで、そのうしろ姿をいつまでも見送る芳江だった。芳江の瞳から溢れる

ように涙が流れた。片桐二郎と別れる時は決して流れなかった涙だった。

修学旅行

4

秋の終わり、葉子は中学の修学旅行の最後の日に京都の神社に行った。うっそうと木々が乱立している中、緑のトンネルのようにその長い階段はあった。

「これを上るの！」と一斉にため息まじりの歓声があがった。どこまでも伸びている長い階段。下から見上げただけでは上は霧に隠れて見えないほど。

「緑の階段を抜けると、そこはゆき倒れだった」誰かが叫ぶと一斉に笑い声が起こった。その一言に元気になったのか、皆は張り切って階段を上りはじめた。葉子も最初は元気が良かったが、半分も行かないうちにその足どりは亀のようになっていった。やや肌寒い時期にもかかわらず噴出す汗を拭ながら葉子は必死に登った。

「軍隊の訓練でもここまではきつくないよな」皆はぶつぶつ言いながらも、時々吹く風の心地よさを頼りに一歩、一歩、足を踏ん張って上って行った。あと少しのところに来ると、皆はすっかり元気になって、足取りも軽く駆け足で駆け上っていく元気な生徒もいた。

「我、頂上を征服せり！」上りきった生徒はグリコの看板みたいに両手をあげてVサインをしていた。その声につられて葉子は上を見た。

「あと少しだわ」葉子は友達の佐々木早苗（ささきさなえ）と励まし合いながら、棒のようになった足に力を込めて上って行った。そして葉子は最後の一歩を前に出すと、早苗と同時に踏ん張るように境内の土を踏んだ。一瞬に視界が広がり目の前には神社の朱色の鳥居が見え、広い境内には神聖な空気が満ちているようだった。その時、強風が吹いて一斉に緑の葉と葉がぶつかりあった。そのパサパサという大きな音が幾十にも重なり合って葉子をつつんだ時、悠久の時の中で自然の営みが葉子たちを喝采してくれているように思えた。

思い思いに散策に出かける中、まずは甘いものをと葉子は「何か、おいしいもの食べようか」と早苗と売店を覗きこんだ。甘いもので お腹をいっぱいにすると、買い忘れた土産も買って葉子は売店を出 た。売店を出たところから短い階段を上って行くと左に道が伸びて いた。その先に縁結びの神社があった。葉子と早苗はにっこり微笑 むと「行こうか」早苗のその声に葉子もにっこり笑って頷くと足取 りも軽く神社の方へ歩き出した。短い階段を上り終わった時だった。 丁度、下りようとしていた同じクラスの男子学生二人連れの近藤治虫と土方俊夫と出合った。

「どこへ行ってきたの」早苗が声をかけた。

「いや別に・・・」照れたように土方は頭をかいた。葉子は早苗の横 でにっこりしながら黙って立っていた。

「縁結びの神社に行ってきたんでしょう。まさか私の名前を書いた んじゃないでしょうね」早苗は土方の肩を軽く押した。

「違うよ、この山には財宝伝説があるんだ。だから秘密の財宝がな いか探検して来たんだよ」近藤が土方と早苗と葉子の顔を順番に見 ながらポケットの中から光る物を取り出した。

「何よそれ？」

「さっき見つけたんだ。きっと秘密の財宝を埋めた時に落ちたんだ と思う」

「信じられないわ」

その時、同じクラスの沖田正二が「又見つけた！」と喜び勇んで 走って来た。その手には同じように光る石があった。

「きれい！ルビーみたいね」葉子がその青紫に光る石を覗き込むよ うに見ていると「きれいだろ、ゴホッ」咳き込んだ沖田が前を見る と葉子の顔があまりにも近くにあったので驚いて一歩下がった。沖 田が葉子に好意を持っているのを知っている早苗は軽い気持ちで葉 子の方へ沖田の背中を押した。沖田の身体は足は前に進もうとしつ つ、頭は止まろうとしてそのまま不自然な状態で葉子の身体に当た ってしまった。驚いた葉子は咄嗟に手が前に出て軽く押したつもり

だったが、残念な事にそこには短い階段があった。押された沖田は「あぁぁ～」と叫びながら階段を転び落ちた。
その時、葉子の心に針の先で突いたような小さな穴が開いたのを葉子は気がつかなかった。驚いた早苗と葉子はあわてて短い階段を下りて沖田に近づいた。
「おーい！そんな事くらいで怪我しているようではこの日本を改革する事など出来ようか」階段の上で近藤治虫は叫んでいた。
その声を聞いて、階段の下でうずくまる沖田正二が肩肘をついて上をぐっと見上げた。
「沖田！又、宝を探しに行こう」土方も沖田が階段を落ちる時に落とした、光る石を手に持って高々と空に突き上げた。
沖田は何ごともなかったようにすっくと立ち上がると「これしきの事ぐらいで降参する沖田ではない！コホッ」と見得を切って軽く咳をした。
「よし！それでこそ沖田だ！きっと財宝を見つけてこの日本を変えて見せるぞ」
「日本の夜明けは近い！」階段の上で近藤と土方は胸を張った。その目は改革の炎に燃えているようだった。
沖田は前を見たまま葉子を見る事が出来ない「財宝を見つけた暁にはきっと・・・」感極まって声が途絶えた。
「沖田！時間ない。行くぞ！」近藤の声が飛んだ。
「男には何よりも大事なものがあるんです、必ず又会いましょう。いざ、さらば！」沖田はそう言うとほほ笑みを残し、お尻の痛みに耐えながらも振り返る事なく脱兎の如く階段を駆け上って行った。三人は瞬く間に鬱蒼とした山の中に消えていった。寒い季節にもかかわらず暑苦しい空気を満々と残しながら。
「何んなの？あの三人」早苗はあきれていた。
「沖田君って胸を病んでるのかしら」葉子は三人がいなくなった階段の上を見ていた。

「どうして？」
「だって、変な咳してたもの」
「気がつかなかったわ」意識外の事には人間は案外気がつかないものだ。
「でも吃驚したわ」葉子はふと緊張から解放されたように身体から力が抜けていった。
「ごめんね葉子。私が変な事したから・・・でも、良かった。沖田君怪我しなくて」
「でも、階段駆け上がるとき、なんかお尻を触っていたわよ」
「尻餅ついたからね」
葉子と早苗はお互い顔を見つめてにっこり笑うと、今の出来事を忘れようとばかり早苗が口を開いた。
「好きな人いる？」
「どうしたの突然」
「好きな人の名前を書くと、その人と結ばれるんだって」早苗は嬉しそう葉子の顔をのぞきこんだ。
「そうなの、でも思い浮かばないわ」葉子は思案気に答えた。
「沖田君は？」
「その話は忘れて！」葉子の顔が河豚のようにふくれた。
「でも好きな人いるでしょう、福田君とか、阿倍君とか」
「それは早苗でしょう」
「今は違うわよ」
「えっ、もう別れたの」
「ころころ変わっちゃうのよ・・・」
「で：誰なの？」
「名前を明かすと駄目なのよ。だから秘密」
「だったら、私も言わない」
「言わないって、いないんでしょ」
「いないけど、いたりする」
「変な言い回しね。それじゃお互い秘密にしましょう」

「すぐにばれたりして」そんな話をしながら歩いていると、「俺の名前を書いてくださいね」同級生の小泉俊一郎が顔を出した。
「それだけはないわ、天に誓って」早苗が口を尖らせた。
「天に誓うって、勘弁してよ」小泉俊一郎は手を合わせて早苗を見た。
「天にも地にも誓うわよ」早苗は大げさにそっぽを向いた。微かな笑い声が境内に響いた。

縁結びの神社には若い女性連れや若いカップルやらで賑わっていた。早苗と葉子はそこで良縁のお守りを買うと、白馬に乗って王子様がやってくる事を願いながら、大事そうにかばんの中にしまいこんだ。白馬に乗って来られると大いに引いてしまうと思いながら。

楽しいひと時はまたたく間に過ぎていった。それが楽しければ楽しいほど、その過ぎていく時間は早く感じる。まさに、少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、である。老いてからこの意味を知る者のいかに多いことか。

「又、この階段を降りるのか」ため息交じりの声に歓声はなかった。生徒たちは整列しながらゆっくりと降りていった。葉子が階段を降りはじめようとした時、前の男子が急に立ち止まったので、その男子の背中に身体がぶっつかるように当たってしまった。男子はつんのめるように踏鞴を踏んで、階段を二三段すべり落ちた。
「ごめんね、大丈夫？」葉子はあわてて謝った
「大丈夫だけど、君の身体は温かくてやわらかかった・・・・」男子は自分の胸を両手で押さえながらうっとりした顔で葉子を見た。葉子は顔が赤くなるのがわかった。
「いい加減にしなさい。さっさと進まないからよ」友達の早苗が大声を出した。
その時である。

葉子の心の小さな穴を鋭い刃物が突き刺さした。突然の思いがけない頭の痛みに泣きたい思いで立ちすくんでしまった。それは幼い時に近くの神社の階段で泣いていたあの時のように。幼い葉子のそれは記憶と呼ぶにはあまりにも刹那の瞬間だった。葉子の目が果てしなく連なる下だり階段を見た時、記憶の闇に潜んでいた魑魅魍魎が葉子を容赦なく襲った。そして葉子は驚いて呆然とする早苗の身体にもたれかかるようにその場に崩れ落ちた。

葉子は早苗に抱き起こされるまでそんなに時間はなかった。他の生徒は心配しながらも「軽い貧血だから」の先生の一言で先に階段を降りて行った。葉子はそこでしばらく休んでから、残ってくれた早苗と付き添いの先生と三人で階段を下りて行った。

「急に目が回っちゃって」葉子は先生に申し分け無さそうに頭を下げた。

「高所恐怖症とかじゃないの、高い場所が苦手とか」早苗は元気になった葉子を見て安心した。

「そうね、高いとこは嫌いかも」

「だから成績も高いとこが嫌いなんだ」と早苗は舌を出して笑った。

「あたり！でもそれは早苗も同じでしょ」

「だったら私も高所恐怖症？」

「おそらく、きっと成績高所恐怖症！」

「なに、それ？」

先生は二人の会話を聞きながら元気に階段を降りる葉子を見て安堵の表情を浮かべた。

ただこれ以来、葉子は階段を降りる時、度々頭が締め付けられるように痛み、胸が苦しくなって階段の上で立ち往生するようになってしまった。勿論、修学旅行のこの経験が原因だろうくらいに考えていた葉子だった。それ以前にあった幼い頃の事など分かる筈もないし、思い出す事などないからだ。

5

葉子は高校生になる頃には、両親は離婚したことを知っていた。別れた理由までは知らなかったが、ただ足が悪く満足に働く事ができない父が言い出したらしいとは、親戚の人の話で知った。しかし母の口から、そのことについて真実を一度も聞いた事がなかった。そしてなぜ、父の足が動かなくなったのかも葉子は知らない。

母が何故か話したがらないからだ。葉子も聞かなかった。父の話を家の中でしてはいけないというそんな空気があった。しかし親戚の人が集まって酒が入ると、二郎が酒の魚になった。

「あの男は足が悪いのをいい事に、家族を捨てた悪魔みたいな奴じゃ」親戚の長が開口一番、二郎は悪魔になった。

「足が悪いのに芳江に乱暴をするし、葉子を叩いたりしたらしいじゃないか」

「足を怪我したのも女遊びが原因らしい。芳江も苦労したもんだ」

「今はどんな生活している事やら」

「なんでも、実家に戻ってからは母の面倒を見るどころか、やりたい放題らしい、結構借金もあるらしいよ」

「養育費をちゃんと送ってきてるのかい、芳江」芳江の姉が顔を赤くして言った。

「さぁ・・・」芳江は笑って答えない。

「あんたも男運が悪いよ。うちの旦那みたいに一流大学を出て、一流企業で働いてる男を探さないから貧乏くじ引くんだよ」そんな姉の声に芳江は言葉をつげない。

「お前とこの旦那、暮れのボーナス百万超えたらしいってな」芳江の姉と親しい叔父が口をはさんだ。

「そうなのよ。百五十万超えてたわ」

「やはり一流企業は大したもんだ。うちの会社なんか・・・」話はこ

の辺りから芳江を置いて自慢話と自虐話へと変わっていく。
誰しも憎しみがある内は別れた人間を決して良くは言わないものだ。母方の親戚ならなおさらである。

少なくとも葉子の記憶の中には足を引きずって歩く父の姿があった。父が優しかったとか怖かったとかそんな記憶もなく、父から逃げていた事ぐらいしか覚えていない。それだけで充分だった。事実なのは、葉子があれ以来、一度も父の顔を見ていないということだ。父が今どうしているかフト考えることがあっても、自分から家を出て行った父に会いたい気持ちなどは、葉先から落ちる雫ほどもなかった。好きな母が辛い労働をしている姿を見て、時として涙を流す葉子だったが、そのことは嫌いだった父への憎しみをさらに増大させていった。

葉子は葉子なりに母の事や自分の将来の事を考えていた。高校二年の夏休み、夕食が済んで台所でお茶を飲んでいる母に向かって葉子は言った。

「お母さん、私コンビニの早朝のバイトする事に決めたよ。」

「・・・朝、起きてこれるの」芳江は微笑しながら本気にしなかった。

「高校のクラブは最後までやりたいから、早朝のバイトしか出来ないのよ」

「バイトしてくれたら少しは助かるけど。・・・でも、いいのよ、無理しなくても」

「大丈夫だって、お母さんを少しは助けないと」葉子は胸を張った。母はただにっこり笑っただけだった。椅子がガタッと音をたてて葉子が立ち上がった。

「それと・」葉子は一瞬、黙ってから目を見開いて母を見た「私、高校出たら働くから・・・」

「えっ・大学へ行くって言ってなかった」母は怪訝そうな表情をした。

「別にいいの」

「小学校の先生になりたいのでしょう」
「生活大変だし、大学ってお金いるんでしょう」椅子に座りながら、葉子の声はだんだん小さくなっていった。
「大丈夫よ、そのためにちゃんと貯めてあるから」芳江はニッコリ笑った。
「ほんと！」椅子がガタッ鳴った。
「大学を八年行っても大丈夫よ」
「それじゃ卒業したら適齢期が過ぎちゃうじゃない」葉子は嬉しかった。
「目が肥えていいんじゃないの」
「よく貯まったね、そんなお金」葉子は不思議に思った。
芳江は椅子から立ち上がりながら葉子に背中を向けた。
「片桐二郎から、葉子への養育費よ」
「片桐：二郎」葉子の口から微かに漏れた。久しぶりに聞く父の名前だった。
「皆が言うからどんな悪い人かと思ってたけど、養育費をちゃんと送ってきてたんだ」
「それは一度も欠けた事はないわ」
「全然知らなかった、なぜ言ってくれなかったの」
「これは、なかったことにしてたの、いつか葉子のために使おうと思って黙ってたのよ」
その時、葉子は素直に喜ぶ気持ちにはなれなかった。
「嘘でしょう」
「どうして？」
「だって家族を捨てた人でしょう、どうして養育費なんか送ってくるの？」
「きっと、お父さんがいい人だったからじゃないの」芳江の軽く言った一言だった。その言葉に導かれるように葉子は真っ白な霧の中に立っていた。
「私はお父さんが嫌いだったことしか思い出さない。どうしてこん

なの娘のために養育費を送り続けてきたの。いい人って嘘でしょう。家族を捨てた悪い人なんでしょう」葉子は混乱している自分を止められない。

「私はそんな人からのお金で大学に行きたくないわ。」母に対して自分をこれほど強く意思表示したのはこれが初めてだった。

母は何も言わなかった。にっこり笑っていつものように葉子を見た。その時、芳江が飼っているシロと言う名前の黒い猫が葉子の足元ににじり寄ってきた。葉子はかがんで黒い猫のシロの身体をさすりながらも胸の高鳴りをなかなか止める事が出来なかった。

「お母さんも少しくらいお金持ってるし、奨学金を使う手もあるし、そんな事、気にしないで葉子は勉強してたらいいの」芳江は葉子自身が父親のことを少しでも考え始めたことがなんとなく嬉しかった。

片桐二郎が葉子の父に違いがないのだから。幼い頃、父が嫌いであっても、葉子が父の思いを受け止めることが出来る日が来る事を芳江は信じていた。

「葉子にやっぱりアルバイトしてもわらわないと」芳江はうずくまって黒い猫のシロを撫でている葉子の背中を軽く叩いた。シロと言う名前の黒い猫はその時飛び跳ねるように葉子の足元から離れていった。

「アルバイトしながらでも大学はいけるわ。でもお父さんのお金少しくらい使ってもいいわよね。お父さんも喜ぶかも」葉子は明るい顔を向けた。

「・・・」少しづつ、少しづつ、父に近づいている葉子を芳江は嬉しくもあり、一人の大人の女として母の元を巣立っていく寂しさも感じていた。

二郎からの養育費は、決まった金額が一度も欠けることなく送られて続けてきた。芳江はそのお金を葉子が高校、大学へ進学するために貯めておくつもりだった。しかし結局、葉子が大学に入学して

四年後に卒業するまでに二郎の養育費に手をつける事はなかった。
「葉子の結婚式にあなたの父を招待できるようにその時まで使わずにおきましょう」芳江が微笑んだ。
「いつになるかわからないけど・・・・」はにかむ葉子の言葉をかみ締めながら、父と娘が再会する日を芳江は想像していた。
そう遠くないその日のことを。
「いつになるか・・・・わからないけど」芳江は再び葉子を見て微笑んだ。

6

葉子が住む家と片桐二郎の実家は鉄道の五駅へだてた距離にあった。決して遠くない距離なのだが、葉子にとってのその五駅は無限と思われるほど遠かった。

芳江と別れた片桐二郎は実家に戻って母と二人で暮らしていた。父は早くに病気に倒れ、3歳上の長男の精一郎（せいいちろう）は仕事の都合と言って嫁の貞子の実家の近くに家を買って住んでいた。仕事の都合は口実で、二人姉妹の姉の貞子が両親の面倒を見るのに都合がいいから、貞子が半ば強引にそこに家を買ったのが実情だった。5歳下の三男の幸三（こうぞう）は小さな劇団で演劇をしていて、テントを抱えて全国を回っているのでほとんど実家のほうには寄り付かない。又、二郎とて足が悪いので満足に母の面倒を見ることは出来ないが、それでも二郎が離婚して家に帰ってきてからは母も少しは元気になったように思えた。世間では長男が身体の弱い母の面倒はみるのが本当なのだろうが、母自身が頑ななまでにそれを望まなかった。年に数回の墓参りに姿を見せるだけだった。その時は母を連れ出し高級料亭で食事をして、家にもよらず帰っていくのだった。

「兄貴に戻ってきてもらった方がいいんじゃないか」二郎も最初は母によくそう言っていたが、生返事の母を見て今ではほとんど言わなくなっていた。

二郎が離婚したその年の暮れ。

「今日ね、貞子（さだこ）さんと精一郎が来たのよ」母が外から帰ってきた二郎に向かって嬉しそうに言った。

「あ、そうかい」気のない返事の二郎だった。

「これはね、貞子さんが買ってきてくれたのよ。有名な和菓子屋さんの和菓子の詰め合わせ、きっと高かっただろうね」母が喜ぶのが二郎には嬉しかったが、なぜ精一郎が来たのかが気になっていた。

「なんの用事だった」二郎は足をこすりながら椅子に座った。
「なんか今度の長男の亮一（りょういち）が高校受験らしい、それでよく分からないけど有名な進学校に進ませるため、こっちの家に来てもいいかって、そんな話だった」母は和菓子の詰め合わせの中から一つ取りだして「これおいしいから食べてごらん」二郎に渡した。二郎はそれを食べながら「兄貴が戻ってきたら俺は厄介者になるから、どこか別の家を探さないと駄目だな」そう考えた。
　長男がどんな理由であれ家に戻って母と一緒に暮らすのはいいことだし、その場合は自分が別のところに住めばいいと思っていた。幸い、得意の書道で教室を開いたり、伝手を頼って文字を書いたりしながら何とか一人分くらいは稼ぎ出せていた。贅沢さえしなければ人の三倍の時間をかけてゆっくり人生を生きていくことが出来るような気持ちになっていた。
「心配しなくてもいいよ」お茶を飲みながら母は足の悪い二郎を不憫と思っていた。
「何が？」
「一緒には住まないから」母はそんな二郎にお茶を入れながらいつものように、それはまるで自分に言い聞かすように呟いていた。
「せっかく兄貴がそう言ってきたんだから一緒に住めばいいんだよ」二郎は熱いお茶をふうふう冷ましながら、テレビに目をやったまま「まだ元気だけど、何時また寝込むか知れたものじゃないし」
「まだまだ大丈夫」母は笑っていた。
「だけど、そんなことは前から分かってたろうに、突然どうしたんだろうね」
「いろいろ考えてのことじゃないの、亮一に一生懸命だから貞子さんは、成績も学年でトップらしいよ」
「知っているよ、会えば必ずその話になるから」
「まぁこの家のこともあるのだろうけど」何気なく言った母の一言だった。二郎はそんな感じがしていた。二郎がこのまま家に住んでしまうと二郎に家を取られるように思ったのかもしれない。

「足の悪い俺よりやはり兄貴がこの家に住むのが一番いいよ」二郎はそう言って自分の部屋にゆっくり歩いていった。
「仕事があるんだ。小説の題字を頼まれてね」隣の部屋の襖を開けて、足を引きずりながら部屋の中に入っていった。

年が明けて正月になると恒例の年始回りで長男夫婦が子供を連れてやってきた。次郎はやはりこの年も帰ってこなかった。
母手製のお節料理がテーブルの上に並んでいた。もっぱら母と貞子さんが世間話をしながら無口な二郎は時々相槌を打つだけで会話には入らなかった。兄の精一郎は貞子さんの会話に所々説明を加えていたが好きな酒を飲むにつれて二郎に絡み出した。
「お前が離婚してこの家に帰ってから～」精一郎の顔はすでに赤くなっていた。
「回りの人間がうるさくてしょうがない、ちゅうのも～足の悪いお前に母の面倒を押し付けているように思われてる。えぇ～お前がこの家に帰ってきてから俺は肩身(かたみ)の狭い思いで生きているのだ。分かるか？二郎」二郎はこんな時はうなずくに限る事を知っていた。
「うん、分かるよ、分かる」二郎が答えると「返事は一度でいい」と精一郎の声が飛んだ。
「だから、お前も男だったらこの家を出てりっぱに一人暮らしをしてみろ」一人暮らしが立派かどうかは知らないが「ま、考えてみるよ」二郎はトイレに立つ振りをしてその場から離れた。
「ま、まったく、足が悪いだけじゃなく、あ、頭まで悪いんだから～」すっかり酔いが回った精一郎はゆっくり歩く二郎の背中に大きな声で叫んだ。
「・・・頭が悪いから、足を悪くしたのだろうさ」二郎は苦笑いしながらその場を立ち去った。

そんなことがあってからも、度々、兄夫婦はこの家を訪れては母の歓心を買うのだった。あまりに何度も一緒に住もうと言うものだ

から、母はそのたび嫁と姑が一緒に暮らす事がどれほど大変な事か自分の体験を交えて話をするのだった。

「兄貴がこの家に帰って来たら、俺はこの家から出て行くつもりだから」ある日、二郎が訪れた兄に向かって言った。

「そうか、息子のこともあるしそうしてくれたら助かるよ、なんせ東京大学を目指しているのだから環境が大事なんだ」一郎は煙草をくわえながら平然としていた。

「そうですわね、亮一が受験する高校は毎年、東大に何十人も合格者を出している高校だから本当に大変なのよ」貞子も首にかけた高級そうなネックレスを気にしながら、その高校に入学するのがいかに難しいかを力説するのだった。ただ母が頑固なまでに一緒には住まないと拒(こばむ)むので困っていると精一郎は二郎に愚痴った。

「せっかく一緒に住んでやろうって言ってるのに、一人が気楽だって言うんだから、ほんとに頑固なんだよ。いつまでも元気なつもりでいるんだから」

「母が、嫁と姑の事で苦労してきているから貞子さんにそんな苦労は味合わせたくないんだろう」二郎は母がいつも言っている言葉を繰り返した。

「母が嫌なら仕方がないでは済まないのだ」精一郎は二郎を睨み付けた。

母は台所で料理をしていた。それでも貞子は客人よろしく料理を手伝おうともせず、部屋でお茶を飲みながらくつろいでいた。

「難しいことは分からないが、母が嫌だと言えばそれで終わりの話だと考えた方がいいんじゃないか。」二郎の言葉に貞子が口を挟んだ。

「二郎さんが一緒に住んでいるから、お母さんもそんな事を言えるのよ」

「足の悪いお前でもいれば少しは心丈夫だからな、幾ら足が悪くてもまだ若いしそれなりに動けるから、お前に面倒見てもらうつもり

なんだろう」精一郎が吐き捨てるように言った。
　二郎は二人が何を言いたいのかは解っていたが、母にとって最善の方法を二郎なりに考えていた。
「だから、お前がここから出て行ったら母も頷いてくれると思うんだけど」精一郎の気持ちが高ぶっているのが二郎には解った。立て続けに煙草に火をつけるその手が小刻みに震えていたからだ。
「お前もすぐには出て行けないだろうから、俺の知り合いの不動産屋にあたってあるんだ。すぐにお前に合った部屋を探してくれるよ」精一郎の声に、二郎はずい分の手回しのいいことだなと呆れるばかりだった。しかし芳江と別れる時、お互い絶望的な状況ではあったが、母の面倒を見るために帰ると言った言葉が嘘になるのではないかと考えると逡巡してしまい、葉子の顔を思い出すたび葉子がいつこの家を訪れてもいいように、この家に住んでいたほうがいいのではないかと思ってしまう二郎だった。引きずるように歩く二郎の足が元のようになったとしても、葉子が二郎を訪ねて来る事などありえない事だと分かっていても、いつの日か訪ねて来るのではないかと微かな期待を抱きながら二郎は生きていきたかった。その日が永久に来ない事をうすうす感ずきながらも。

　しかし、その話もあっけなくご破算になった。母がやはり一緒には住まないと長男夫婦に通告をした事もあるが、自慢の亮一がその進学校の受験に失敗したからだ。それまで度々の訪問も、前のように年に数回の墓参りの時に母と食事をして家にも寄らず帰って行くようになった。

3度の飯より

7

葉子には大学に入学してから交際している恋人がいた。

大学のサークルで知り合ってからの付き合いだった。鯨島学（くじらしまなぶ）という名前を聞いた時、葉子は思わず笑ってしまい、葉子が鮫島葉子（さめじまようこ）と名乗った時、鯨島学が思わず吹き出した、以来ずっと離れずにいた。初めてのデートの時、海へ行こうよと二人同時に言った。そして、渚に佇んで鯨と鮫が海に沈む夕日を見つめ、風はやわらかく二人をつつんだ。

「鯨島さん夕日がきれいね」葉子はそう言った。

「きれいなのは夕日だけじゃない。さざ波の音もきれいだよ」鯨島のその声は遠くから聞こえてくるようだった。

「そうですね。心が洗われるようだわ」

波の音は絶え間なく押しては引いていった。誰が聞いていようと聞いていまいと、それは当たり前のように繰り返される。

鯨島は砂浜に座って後にした両手で身体を支えていた。葉子は膝を抱えるように前かがみになって座っていた。その時、葉子は夕日にそよぐ風になりたかったのかも知れない。

「鮫が好きですか？」さざ波が葉子に言わせた言葉だった。

「鮫の肉は腐りにくいし、料理しだいでは美味しいんだ。でも鯨のほうが美味い」

「肉の話じゃなくて」葉子の両腕がさらに身体を抱え込んだ。

「水族館で見たジンベイ鮫の大きさには感動したよ」鯨島はジェスチャを交えて言った

「そう言うことじゃなくて」葉子の身体は膝を抱えたまま、その顔は砂浜に埋もれてしまうほどだった。その時、反り返っていた鯨島は身体を起こすと葉子の顔を覗きこみながら言った。

「もちろん葉子鮫は、3度の飯より好き」

「３度の飯・・・」葉子の夕日は一瞬にして雲に隠れ、突然、風は止んだ。葉子は鯨島を見つめてため息をついていたが、鯨島学は間違い無く葉子が好きだった。３度の飯よりもずっと好きだった。
「そうだ、今日は海に来たから、次は山に行こう」
「山は苦手だわ」
「海の生き物だから」
「そうじゃなくて、中学生の頃に山に登って長い階段で転びかけたのよ」
「山で転んでも、海ではおぼれない」
「プールでおぼれかけた」二人は夕日の中で笑っていた。
「じゃ、山は止めようか」鯨島は葉子の顔を見つめながら押し寄せる波の音を聞いていた。
「でもいいわ、山にハイキングに行きましょう」葉子は肩で鯨島の肩を押した。
「よし決まった！鯨と鮫が山にハイキングなんて洒落てるよ」
肩と肩を寄せ合う二人は沈む夕日の中で一枚の絵画のようにそこに佇んでいた。
運命の糸は複雑に絡まっていた。見えない糸の先を手繰り寄せながら人は静々と生きていく。どんな思いがけない世界がその先に待っていようと。
二人は皮肉な運命の糸に絡まるように、鯨島がセッティングした山にハイキングに行く事になった。
緑の中、ひたすら長い階段を二人は上っていた。「この神社は友達が教えてくれたんだ。長い階段を上ったら、そこには幸せが待っているんだって」
「幸せが待ってるんなら、上らないと」葉子の足取りは口ほどにもなく重くなっていた。
「幸せにはそう簡単に届かないものだな」鯨島学も息を切らして立ち止まってしまった。
その横を６０代の夫婦らしい人が元気に通りすぎていった。

「しっかり！元気出して、もうすぐよ！」
それを聞いた二人にようやく笑顔が戻ってきた。
「頑張ろう」葉子がにっこり笑うと上を見た。６０代の夫婦はずい分前を歩いていた。振り返って葉子に手を振っている。葉子も手を振ると少し元気になったような気がした。しかし、ふと気がつくと二人は話すことを忘れたかのように無口になっていた。「幸せは遠くにあって思うものか・・・」鯨島が呟いた。葉子は再び上を見た時、その階段はまるで天までつながっているかのように雲の中に霞んでいた。６０代の夫婦の姿もすでに見えなくなっていた。
「幸せが待っていると思うと、いつまでも辿りつかない様な気がしてきたわ」葉子はため息をついた。
「誰も幸せが何かわからないのかも。」
「だったら、いつまで上ってもそこには到着しないってことなの」葉子は再びため息をついた。鯨島は葉子の手を取って笑った。突風が木の葉を飛ばし二人の間を吹き抜けていった。時に、風は粋でいじわるな嫉妬をするらしい。風に驚いた葉子は鯨島の身体に抱きついた。
二人の間で時が止まった。
二つのシルエットが一つになった時、風がさらに強く吹き荒れて、カエデの葉が空を舞った。
学は葉子を、骨が折れるほど強く抱きしめていた。葉子の顔がそこにあった。二人のくちびるが風に押されて重なりあった。
時に風は粋でいじわるな嫉妬をするらしい。胸の高鳴りを隠すように目を瞑った葉子は人肌とは思えない冷たい感触にくちびるを離して少し目を開けた。
そこには目を細めた鯨島学が口にカエデの葉をつけて立っていた。
「初めてのキスがカエデの葉かよ」鯨島はカエデの葉を手にもって笑った。
「ドキドキして損したみたい」葉子は鯨島の顔を見て微笑んだ。その時風は止んでいた。風が吹くのを忘れるほどの、今度は本当にあ

たたかいキスをした。ドキドキして損した気持ちを取り返そうとでもするかのように。カエデの葉が鯨島の手を離れてヒラヒラと下に落ちていった。

「階段転ばないでね！」二人の側をさっきの夫婦が声をかけ微笑みを残しながら下りていった。ずいぶん時間が過ぎていた…葉子は恥ずかしそうにはにかむと上を見てさらに驚いた。階段の終わりがすぐそこだった。目の前に赤い鳥居が頭をのぞかせていた。

「幸せって待ってないのかも」鯨島が葉子の顔を見つめながら遠い目をして言った。

「ほんと！せっかくここまで上って来たのに…」鯨島はそれには答えず葉子の手を握りゆっくりと階段を上りはじめた。葉子もその手を強く握り返して歩き出した。さっきのような足の重さは不思議となかった。

「もう少しだ」鯨島の声に葉子も元気がでたのか、ここまで来たからには、そこにある幸せを捕まえようと鯨島の手を引っ張って上っていった。

神社の境内の片隅に軽い食事ができて、昔ながらの土産を売っている店があった。一人の女の人が店の前で参拝客と立ち話をしていた。鯨島と葉子は参拝を済ますとその店で食事をすることにした。客は誰もいなかった。二人は窓際のテーブルに腰を下ろした。鯨島が注文し終わると葉子を見た。葉子はその窓から外を見ていた。そこにはさっき上って来た長い階段が霧のように見えていた。それを目にした葉子は小さな吐息を出した。

「私、中学生の頃に階段を下りる時、転んだ事があるから下り階段が嫌いなのよ」

「行きはよいよい、帰りは怖い…か」学はメロディをつけながら言った。

「今でも胸がドキドキするわ」

「そのドキドキは・・・さっきの階段の・・・」鯨島がそこまで言った時、店の女の人が注文の品をお盆にのせて持ってきた。

テーブルの上で熱いお茶が湯気をたてていた。

店の女の人が新しいお茶を入れてくれたのだ。そしてそこを離れようとした時、鯨島はその女の人に声をかけた。

「その階段でないと下へは下りられないんですか？」

やかんを持って振り向いた女の人は５０才くらいの人だった。

「少し時間はかかるけど、この店の横に階段の下に下りれる道があります。その道をいけば下りれますよ」その方向を指さしながら教えてくれた。葉子はほっとしたのか「よかったわ」とため息とともに声が出た。

「怪談話だもんね」店の女の人が意味なく笑った。鯨島と葉子は意味がわからなかった。

「でもね、今から１５年くらい前かな・・・この階段で事故があったのよ。小さな女の子が泣いていたわ」

8

店の女の人は感情を抑えるようにうつむいた。そして前を向くなり両手を前に出して顔を二人に向けた。

「小さな女の子が今にも階段を降りようするお父さんの背中を押したの。こんな風にね」

「え！マジですか」鯨島はオーバーに驚いて見せたが、さほど興味があるようには思えなかった。

「大変な騒ぎだったのでよく覚えてるわ」

「で　その人はどうなったの」葉子が女の人と鯨島の表情を見比べながら、微かに微笑みをうかべて聞いた。

「それはよくわからないけど、足に大怪我したらしわよ」店の女の人は大変なお話好きらしく、それも上手に話をするので葉子はついつい引きこまれていった。そして何かを思い出したらしく大声を出した。

「その小さな女の子の母親が叫んだのよ。私はその声が忘れられないわ」

その時あまり興味なさそうに話を聞いていた鯨島が目を店の女の人に向いた。それにあわせるように女の人の視線が鯨島に移った。

「なんて叫んだの」葉子の声と鯨島の声が同時にでた。

「仲のいい事ね・・・」その声に、二人は恥ずかしそうに頭をかいた。

「だってその母親がこの店で買い物していて、私が精算している時だったから、突然の大声にビックリしたのよ」

二人は顔を見合わせた。

「なんて叫んだの」今度は葉子が聞いた。

店の女の人は一歩下がってから、お盆を胸の前で持ち、顔の表情を曇らせながら感情込めて叫んだ。

「・・・よう子～！」声が店中に轟いた。

それは悪魔の叫びとなって葉子の耳に突きささった。鯨島も一瞬、耳を塞ぎたくなった。
「ごめんなさい。若いころ演劇をやっていたもので・・・・」女の人は顔を上気させて言った。まるでマリーアントワネットにでもなった気分で。
「ほんと、真に迫る演技でした・・・・」鯨島はあきれながらも感嘆の声を上げた。
「うろたえるお母さんから私がその女の子を預かって、抱きしめてあげたのよ。まだその身体のぬくもりを感じるわ。女の子は嫌がって泣いていたけど、そうそう右の首筋に可愛いほくろがあったわ」
店の女の人の顔が葉子を向いた　。葉子は女の人の声を聞いた時、その声に被さるように違う叫びを聞いていた。葉子の表情が梅雨空のように曇った。
「その母親が律儀な人でね、しばらくしてからこの店に挨拶にこられたんですよ。確か、霧山さんだったか霧島さんだったか」

その時　新しい客が入ってきた。店の女の人は葉子の表情を気にかけながらも軽く笑顔を残して立ち去った。
「とにかく階段を下りなくてもいい事はわかった」鯨島が立ち去った女の人の後ろ姿を見つめながら言った。
「私と同じ名前・・・・」とポツリと漏らした葉子の声に元気がなかった。
「俺だって驚いたよ、突然、よう子～だもんな」鯨島は今、葉子が何を考えているか知っていた。葉子の心の中を無遠慮に覗き込んだみたいに。葉子の顔は下を向いた。
「まさか？」それならばと、鯨島は葉子の顔を無遠慮に覗き込んで頭を傾げた。
「よう子なんて名前の子なんか腐るほどいるだろう。何ならこれからよう子って名前の子を街に探しに行こうか」鯨島はその小さな女の子が自分ではないかと考えている葉子をその場から連れ去りたか

った。葉子が窓を見た。窓に写る葉子の首筋に小さなほくろがあった。
「私が葉子で、私が小さい時に父が大怪我して、首筋にほくろがあって、名前が・・・片　桐・・・」
鯨島は手を伸ばせば届きそうだった幸せが、あの一声の叫びで木っ端微塵に吹っ飛んでいったと感じた。今までそこにあったのにと。
「冗談はやめてくれよな。ほんとに。君が葉子で、父が小さい時に怪我をして、首筋にほくろがあって、名前が片桐でも、それは単なる偶然だよ」そう言って鯨島は葉子を見て笑った。
「そうよね、私って馬鹿みたい。・・・葉子なんて名前、くさる！程あるのに。・・・ほくろだって中学生の頃からだし。名前だって・・・それに毎日お母さんの葉子、葉子を聞いているから」葉子はにっこり微笑んだ。それを見た鯨島は安心して、葉子の手をとってゆっくり立ち上がった。
その時、みやげ物屋の店先で店の女の人がこっちに向かって大きな声で叫んでいた。
「片桐だったわ！」その声は店中に雷鳴のように響きわたった。その声が出た瞬間、鯨島は椅子につまずいて「ああぁ～」大声を上げて葉子にぶつかって後の壁に当たった。椅子がガタガタと鳴った。葉子は驚いたように鯨島を見て「ドジね」にっこり微笑んだ。鯨島は椅子を元に戻しながら「椅子がこんなところにあるのが悪い」と毒づいた。
「椅子は前からそこにあったわ」葉子は椅子に八つ当たりをしている鯨島をからかった。
「椅子は悪くない、ならば、誰が悪いのだ」
「別に誰も悪くない。ただどうしようないドジな男が一人いただけ」
鯨島は苦笑いしながら不機嫌な表情でその店を出た。

その事実を知ったところで何になるのだろう。葉子の心の声がそう言っている。父の怪我の原因が幼い頃の自分にあったとしても、

それを今知ったところでいったい何が出来るのだろう。葉子の心は悩みながらも葛藤を繰り返していた。
「私は本当のことを知りたいだけ」葉子は鯨島に搾り出すような声で言った。
「知らなくていい事は知らないほうがいいよ」ただ鯨島はそう言っただけだった。
知らなくてもいい事を人は何故か知りたがる。知って辛くなる事ほど人は必死になって知ろうとする。自分が傷つくのがわかっていてもそれを止めることが出来ない。傷ついて奈落のそこに転落するまでを見届けようとするかのように。

「今日は有難う。楽しかった」葉子の声は鯨島に虚ろにひびいた。鯨島は葉子のうしろ姿を見つめて思っていた。時は、そんな小さな頃の事をなぜ今頃になって葉子に突きつけるのだろうか。ただ鯨島は葉子の辛さに立ち入ることは出来なかった。葉子は知られたくない秘密には誰一人として立ち入ることを拒んだ。
葉子の歩みは夜の闇の中に立ち止まったかのように進まない。

慎二との出会い

9

葉子はその話を母親に話したが、父が仕事で怪我したとしか言わなかった。やるせない気持ちを抱きながら葉子は受験勉強に打ち込んだ。

ただ時間がすぎていって、頭の中に黄色い風が吹いて、灰色の脳細胞の記憶を少しずつ、少しずつ吹き飛ばしていった。葉子は不確かな記憶の中にいつまでも縛り付られているわけにはいかなかった。春風と共に無事に大学にも入学して、やや大人びた娘になって大学を卒業していった。

葉子は大学を卒業して、念願の小学校の先生として働き出しても、ほとんど父のことを思い出さなかった。

どんな思いを抱いていても、人の世は淡々と過ぎてゆくのだ。人の涙が、川になりやがて、海になろうと、それだけは変わらない現実であった。

教師三年目の葉子は、新学期を向かえて三年生を受け持つことになった。そのクラスに、立花慎二（たちばなしんじ）という、一人の足の悪い男の子がいた。母親が朝、教室まで送ってきて、帰りは迎えに来るという日が続いた。明るい原色の色が似合う、やや化粧が濃い、一見派手な感じの女性だった。ところが、ある日の朝、職員室の窓から、慎二が一人で校門を通って、ゆっくり歩いて来るのが見えた。右足が悪いのか、やはり左足を出してから右足を引き寄せる。それを繰り返しながら、無限の時間を費やすかと思われるほど遅い歩みだった。そばには、いつもいる母の姿がなかった。そのかわり少し遅れて、クラスの友達が数人、その後にばらばらついてくるのが見えた。

葉子は急いで慎二の所まで行くと「歩くのが遅いよ」後からついてきた一人、浩介（こうすけ）が愚痴った。

「ありがとうね、後は先生が送るから」葉子は浩介に笑顔を見せた。

「遅いけど、足悪いししょうがないよ、なあ慎二」それでも皆は先生と一緒についてきた。
「昨日さぁ、慎二のお母さんいなくなったんだって」あわて者の原真由美が言うと、口に手をあてて様子をうかがうように慎二の顔を見た。慎二は寂しそうに笑っていた。葉子の父がそうしていたように、慎二もまた寂しい時も笑うのだった。
「新婚ってやつだろう」知ったかぶりの幹生が横を歩く浩介を見て言った。
「ばか！新婚って結婚したすぐのことを言うんだよ、先生そうだよね」浩介は幹夫のお尻に右足で蹴りを入れながら先生を振り返った。
「じゃ不倫？」幹生の声に「ちりちりん、と風が吹いたら音の出る」とすかさず、浩介が返すと「それは風鈴」幹生が笑って浩介のランドセルを後ろから引っ張った。
浩介が肩をすぼめると幹夫は浩介のランドセルを手に掴んだまま尻餅をついた。
先生が二人を睨むと、浩介と幹夫はお互い笑いながらやや体格のいい原真由美のうしろに隠れた。
「それは今はやりの離婚って言うの」あきれた顔して真由美が後ろの二人に言うと「はやってるのか」と浩介が聞いた。
「そうよ、だから私の友達の・・」真由美は手で口を塞ぐまねをした。
驚いた先生が口をはさんだ。
「いいから後は先生が連れて行くから、みんなは先に教室に行ってなさい」
「はーい」みんなは慎二から離れるとき「ゆっくりでいいからな」と言って肩を軽くたたいて走っていった。

葉子は慎二と二人になって、否応なく父を思い出さずにはいられなかった。きつい言葉で父を傷つけて平気だった子供の頃。何が違うのだろうか。あの時の父と今ここにいる慎二と。一人の大人になって、やさしい言葉で慎二を励ます葉子は、その時始めて取り返し

のつかないことを私は父に対してしたのではないかと、激しく胸をえぐられた。
葉子はそのまま嗚咽(おえつ)すると目が霞み、その場に臥せってしまった。
「先生！大丈夫」そこには泣きそうな声を出して、その場を動かない慎二がいた。
「大丈夫よ、一寸めまいがしただけだから」葉子はすぐに立ち上がると、慎二に手をかした。
「いいよ、先生、少し離れて見てくれたら、僕、歩けるから」慎二は左足に力を入れた。先生の手を離して一人で歩き出した。
「先生！先生が慎二におぶってもらったら！」少し離れた所から浩介が大きな声をだした。
「こらっ！」葉子は拳を作り右手を振り上げた。浩介たちはあわてて後ろに走って逃げた。慎二は前を見て力強く歩いていく。葉子は少し離れてついていった。それはまるで遠い昔の、父の時と同じように。葉子の心の思いが違うだけで他はなにも変わらなかった。それを皮肉というには、あまりにも葉子には切なすぎた。
「慎二！先に行って待っているからな」離れた所からクラスの仲間の声がかかる。
そしてバタバタ走って行く音が聞こえた。グランドに砂ぼこりが舞い上がった。
「・・・先生」皆の姿を見つめながら慎二は情けなそうな顔をしていた。
「なに？」少し離れた所から葉子は、慎二の姿に父の姿を重ねていた。
「僕は別に何も欲しくなんか無いよ」慎二はうつむいていた。
「普通に歩きたい。普通に歩けるようになったらお母さんも家に帰って来てくれるよね」
「お母さんが好きなの」葉子の言葉に慎二は恥ずかしそうに、目に涙をためてこっくりうなずいた。
「きっと戻って来るわよ、慎二君に会いに」葉子は慎二の肩を軽く

叩いた。しかしそれが何の根拠もない言葉だと言う事を一番よく知っている葉子だった。涙を溜めている慎二の気持ちが、あの時の父の気持ちと同じかも知れないと考えると、一人で去って行った葉子の父が今さら哀れに思えた。葉子は父と別れていらい、一度も父に会わなかった自分と慎二を重ねながら、人生とはあざなえる縄のように本弄されるものなんだろうかと思わずにはいられなかった。今、なぜ葉子の前に慎二が現れたのだろうか。慎二にさえ出会わなければ、こんな事考えもしなかったのにと。

小学三年生の時に、足の悪い父と別れた葉子と小学三年生の時に母と別れた父と同じように歩く慎二。この現実をどう受け止めれば良いのか、葉子の頭は混乱して整理がつかなかった。父に会って謝りたいという小さな気持ちが、その時はじめて芽生えたのかも知れない。それは自分が未熟な人間だったと懺悔の小さな叫びなのか、ただ過去の過ちを清算して肩の重荷を取り去りたいためなのか。葉子の全てを許し続けてきた父だった。今、自分が父に対してしなければならない事って何だろう。それがおそらく何一つとして無いという事をわかっていても慎二の悲しそうな目を見て、慎二の足を引きずって歩く姿を見て今までの自分の人生がバラバラに壊れていくのがわかった。

葉子は「立花君、ゆっくりでいいのよ、勉強時間になんか幾ら遅れても」葉子は無理に笑った。

「でも先生、それは、ちょっと」慎二はニッコリしながら頭をゴリゴリ掻いた。背中のランドセルが揺れて小さいキーホルダが青く光った。葉子はそれを手に取った。

「それは、青い鳥のキーホルダだよ。いい事があるようにお父さんが付けてくれたんだ」慎二の背中で青い鳥のキーホルダが揺れていた。

慎二は小さく呟いていた「いい事なんか何もないのに」

運動場の真ん中で慎二の歩みは亀のように遅かったが、葉子の影ともつれ合うように、まぎれも無く真直ぐに教室に向かって進んで

いた。

そして次の日。慎二は父親と一緒に学校へやって来た。慈しむように慎二を見つめる父親と、その影にようになって歩く慎二の姿は葉子の心に影絵のように焼きついた。父親は教室の入口まで慎二を送って来ると、担任の葉子に申しわけなさそうに軽く頭を下げた。葉子がその姿を見た時、その面影に、遠い昔の懐かしい写真を見たような不思議な感覚にとらわれた。いつか何処かで会った事がある人じゃないかと。

「立花…」誰だったろうか。

不確かな記憶の細い糸はぷつっと切れたまま葉子の頭の中で揺れていた。葉子がその糸の先を垣間見ることは決してないのかも知れない。父の足の怪我の原因を思い出す事がないのと同じように。

鯨島との別れ

１０

しとしと雨が降っていた。

ステンドグラスに雨が流れて、貼りついている二枚の木の葉が濡れていた。そんな街角の小さなカフェ。カウンターから離れた隅（すみ）のボックス席に、葉子と鯨島は座っていた。音楽は流れていなかったが、コーヒの香ばしい香りが葉子の心にしみた。濡れたステンドグラスを見ながらコーヒカップをスプーンでカラカラと混ぜた。

「鯨島さん、・・・結婚はまだ出来そうにないわ」スプーンの手が止まった時、葉子はそう言った。

「え、・・・どうしたんだよ、突然」鯨島は驚いたような顔をして言葉を無くした。

「分からないけど、いまは無理みたい。もう少し待ってほしいの」葉子の表情は暗かった。

「待つって、何時まで待てばいいんだよ」葉子自身わからない事を、他人の鯨島にわかるはずもなかった。

「それも今は、分からないの」それしか言えないと、葉子は口を閉ざした。

「・・・自分の事だろう。二人で決める事じゃないか」やや語気を強めた鯨島の表情に、葉子はアイスピックで、脳天を突き刺されたみたいに身を固くした。

「今のままじゃ私、結婚できないの」葉子の精一杯の言葉だった。鯨島はにっこり笑った。３度の飯より好きな葉子の悲しい顔を見るのが辛かった。

「わかったよ、了解！千年も万年も待つよ」鯨島はそう言うと葉子の顔を見つめた。

「待ち慣れてるんだよ、こう見えても」鯨島は軽くグラスを手に持った。

そして「待てど暮らせど来ぬ人の、宵待ち草のやるせなさってね」と言って鯨島はグラスを飲み干した。
ステンドグラスに貼りついていた二枚の木の葉の一枚が雨に流され見えなくなった。葉子は窓を眺めてふぅとため息をついた。
二人は外に出ると雨は止んでいた。いつもは別れるのが辛いはずなのに、彼と肩寄せあって歩く葉子の心の中の彼は、風の中で燃えている蝋燭のようだった。
「もう、終わりなのかな」鯨島は葉子の左手を強く握って言った。
「・・・」葉子は何も言えなかった。言えば心の中が崩れ去ってしまいそうで。鯨島の身体が葉子から離れた。そして、鯨島はまるで戦場へ行く兵士みたいに大きく手を左右に振りながら言った、
「どうして、いつものように、俺の手を強く握り返してくれなかったんだ！」
それでも鯨島は笑顔を残して、今の気持ちを現すように振り返る事なく遠ざかって行った。その時、本当に彼はこのまま、私の所に帰って来ないかも知れないと葉子は思った。それはそれで仕方がない自業自得なのだからと、切ない気持ちに涙する葉子だった。
「鯨島さん、元気でね」小さい声でつぶやくと、葉子は鯨島に背を向けゆっくりと歩き出した。二人の距離は二人が歩いただけ離れて行った。そして、その日、葉子の歩みは止まる事はなかった。しかし、人間は永久には歩き続ける事は無い。悠久の河の流れですら、いつかは海に消え去るように。
そして今、父の事で悩みながら、自分を振り返る時の中に、首をうなだれて佇んでいるのも、葉子自身だった。それは葉子が人間として、教育者として成長した証でもあった。立花慎二のたった一歩が、葉子の頭の中の散り散りに、消えかけていた父の十六年の空白を、一瞬にして埋めてしまった。その時の自分の行動の身勝手さを、慎二とクラスの皆が気づかせてくれた事に心から感謝する葉子だった。

父を訪ねようか？・・・そう思った。
葉子にとってはそれほど遠くもない町へ。父が生活しているというだけで避けていた町へ。葉子の心の中をそぼ降る雨のように悔恨の涙がとめどなく流れた。
葉子は母に言った。
「お母さん、私、お父さんに会いたい」それは突然の言葉だった。
「どうしたの、急に」芳江は別に驚いた様子を見せなかった。
「なんとなく会いたくなったの」
「それは葉子のお父さんなんだから、会ってきたらいいわ」芳江はいつかこの日が来るのを待っていたのかも知れなかった。
「きっと、喜ぶわよ」芳江は微笑みながら葉子を見た。
「でも・・・私の事を怒ってたりして・・・」切ない表情を浮かべる葉子に芳江は「葉子が会いたいんですもの、お父さんも会いたいに決まってるわ」と言って目頭を押えた。
「お父さんって来た事ないよね、私に会いに」葉子はそう聞いた。
「そうね、昔、何度かその先の家の角のところで立っているお父さんを見たことがあるわ。」芳江は昔と言ったが決してこんな事はなかった。毎年、葉子の誕生日には必ず電信柱の影に隠れるように、葉子の姿が見えるまで待っていた。そして元気な葉子の姿をひと目見ると嬉しそうに、足を引きずりながら帰って行くのだった。
「知らなかったわ。教えてくれたら良かったのに」葉子は母を見た。
「だって、あの頃の葉子はお父さんが・・・」芳江はそこまで言って言葉を止めた。
「そうだよね」葉子は苦笑いしながらうなずいた。幼い頃の葉子は父が側に来るだけで逃げて行くような子だった。父が葉子を慈しめば慈しむほど葉子は父から離れていった。
「お父さんの好きなものってなんだった？」葉子は母に聞いた。
「・・・葉子にも食べさすんだって中野の都コンブをよく買って来たわね」母の言葉を聴いても葉子は都コンブを父から貰った事なんか覚えていなかった。

「葉子は食べないからって言ってもね、」
「そうなんだ」葉子はかみ締めるように頷いていた。
「今、思い出したけど、お父さんが家を出て行った日にまだ封の切っていない、中野の都コンブがゴミ箱に捨ててあったのよ」葉子の知らない母の思い出だった。
「お父さんが捨てたの？」
「たぶん、お父さんが捨てたと思うわ」
「どうして捨てたりしたんだろう」葉子は何か思案するように不思議そうな顔をした。
「それは分からないけど」
「その都コンブどうしたの」葉子の胸に夏の終わりの夕暮れのようなさざ波が押し寄せては消えた。
「私が食べた！」母はにっこり笑っていた。
「そう…」葉子は今まで決して考えまいとしていた父の事を、暗闇で目を細めて必死で探すように微かなことでもいいから思い出そうとしていた。
「でも、空になった箱を捨てられなくて今でも置いてあるのよ」そう言うと母は食器棚の扉を開けて紙包みを出してきた。食卓の上で紙包みを開くと中野の都コンブの空箱が出てきた。それを見た瞬間、葉子の手が震えた。
「おかしいでしょう。こんなの置いておくなんて」母はそれを再び包もうとした。
「待って、お母さん」葉子はその母の手の上に自分の手を置いた。
「それ、お父さんが捨てたんじゃないわ」葉子はその手の先にある都コンブの箱をジーと見つめていた。
「どうして」母は不思議そうに葉子を見た。
「それ、私が捨てたのよ。お父さんが私にくれたのを…」
葉子の手の先から離れて中野の都コンブがゴミ箱にゆっくり落ちていった。

時は風のように（前書き）

最終話です。

時は風のように

9

父が住む町を葉子は歩いていた。その横には電車がガタガタと通過していく。過ぎ去る電車を見ながら父の所に向かう葉子の姿は、風が吹けば飛んで行ってしまうほど、はかなく過去の罪の重さを引きずっているように歩く葉子に、すれ違う人々は憐憫の表情をみせて通り過ぎていくのだった。

途中に駄菓子屋があった。店の奥には一人お婆さんが座っていた。夏のかかりの風に、店の風鈴がちりんちりんと鳴って、視線を走らせた葉子の表情が和んだ。その角を曲がって、真っ直ぐ歩く葉子の足音が少しずつ小さくなっていった。正直、このまま逃げて帰りたい気持ちだった。その先に一本の大きな木があった。道はその木をはさんで、右と左に分かれていた。その左の道を行けば、すぐにブロック塀の父の家はあった。葉子は大きな木の前で立ち止まって、父の家の方を見た。気持ちの整理のつかない葉子は、再び来た道を戻り始めた。そして風鈴が耳に心地いい音を響かせ、その風は店の戸口から中に吹き込んで来る。爽やかな風の中、葉子は駄菓子屋の中にいた。

「すみません」葉子はやや大きめの声で言った。

「はーい、はい」中からお婆さんが腰を、ややかがめながら出てきた。

「中野の都コンブありますか」と葉子はあたりを見た。

「コンブですか。はーいはい」お婆さんは店の前に陳列してある、中野の都コンブを見せた。

「全部頂いていいですか」

それは５０個ほど入った箱にほとんど残ったままだった。

「勿論いいですよ・・・」お婆さんはコンブの箱を手に取りながら「好きなんですか？」と聞いた。

「父の大好物なんです」
「へえ、今時、珍しく親孝行ですね」
その時風鈴がちりんちりんと鳴った。葉子はハッとした。
「違うんです。そうじゃないんですよ」悲しげな声だった。
「いいのよ、別に」おばあさんはそういうと、中野の都コンブを袋に入れながら。
「でも一つだけここに残して置いて頂戴ね…」と葉子の顔を見た。
「そうですね、欲しい人がいますものね」葉子は更に一つ手に取ると「一つじゃ寂しいからもう一つ置いておきましょう」と又一つ置いた。都コンブが二つ、信じあえる夫婦のように、仲のいい親子のように、愛しあう恋人のように、棚の上に並んでいた。

店を出た葉子は、再び大きな木の前を通りすぎ、今度は躊躇する事なく父の家の前に立った。葉子の目に最初に映ったのは、売り家という大きな看板であった。玄関の門の横には片桐書道教室と書いてある小さな木の看板が斜めにずれて外れそうになっていた。しばらく立っていた葉子はその場に座り込んでしまった。それを見ていた近所の女性が声をかけてきた。
「気分が悪いんですか？」葉子はその声と同時に、ゆっくり立ち上がり「すみません、大丈夫ですから」と頭を下げた。
「この家の人はね、去年夏のお母さんが亡くなって、足の悪い男の人が一人住んでいたんだけど」女性は葉子の顔をしげしげ見ながら「此処だけの話だけど」と前置きして心置きなく喋りだした。
「…何でも家の相続の事で兄弟の間で結構揉めたらしいよ。普段寄り付かない長男夫婦がなんだかんだと言ってきてね。結局家を売る羽目になったってわけさ、親の面倒は足の悪い次男坊が見てたんだけどさ、他人の家の事だから詳しい事は分らないけど、詰まるところ家を売って引越しっていったって訳なんだよ」聞いてもいないのに、すっかり喋ってしまった中年の女性は、覗き込むように葉子の反応を見ていた。

「引越をしたのですか？」どこに引越をしたのか聞きたかったが、おそらく聞いても無駄な気がしてただ頷いた。
「娘さんですか、片桐さんの？」その女性は好奇心ありげに聞いてきた。
「・・・いえ・・・違うんです」あわてて否定する自分に対して葉子は心が真っ暗になった。私は慎二に優しい言葉をかけられるのに、なぜ父に対しては逃げてしまうんだろう。父に会いたいと思った葉子だが、その心は昔と何も変わっていないと云う事実に慄然とした。
「そうですか、そうですよね」としきりに頷いていた。
「いつも片桐さんは娘さんの話をするんですよ。でもね、私は娘さんなんかいないと思ってましたよ。きっと嘘を言ってると、いる訳ないんだよ。だってこの十何年の間一度だって会いに来たとこを、私は見た事がないんだからさ」その言葉が終わらないうちに奥の家の方から、その女性を呼ぶ声が聞こえた。
中年の女性は喋り足りないのか、少しの未練を残しながらも最後に「この家を買うつもりですか？・・・止めといたほうがいいよ」中年の女性は声をひそめて「ろくな事がないんだよ」

葉子はもと来た道を戻っていった。そして駄菓子屋の前を通り越して駅まで歩いていた。その駄菓子屋の風鈴がちりちりん、と鳴っている。その中で帽子を左手に持って、右手で杖を突いた一人の男が、店のお婆さんと話をしていた。
「都コンブありますか」と杖をついた男は聞いた。
「今日は若い娘さんが一杯買っていったから、二つしか残ってないのよ」お婆さんは奥から顔を出した。
「じゃ二つ貰うよ」
「そうかい」都コンブを二つ手に取ると、小さな紙袋に入れて男に渡した。
「いいんだよ、二つもあれば・・・一つは私が食べて」男の話が終わる前に、すかさずお婆さんが「もう一つは娘さんの分でしょう」と

シワだらけの顔をクシャクシャにして笑った。男は昔からのなじみ客のようだった。
「毎回、毎回、同じことを言ってあきれるでしょう」
「小さい時に別れた女の子だものしょうがないよ」お婆さんはやや腰をかがめ、立っているのがつらいのか奥へ入って椅子に腰を下ろした。
「会いに行けばいいんだよ、自分の娘なんだろう、何度も言うようだけど」と強い口調で言った。
「会うのが怖いんだよ。会いに行って嫌な顔をされるのが」男はお婆さんから少し離れたところから話をしていた。
「家だって売ってしまって、娘さん訪ねるとこがなくなるじゃないの」
「しょうがないよ、背に腹は変えられないよ。それにもう15年だよ」
風が風鈴を響かせる。
「馬鹿だよ、あんた、生意気な口でもきいたら、引っ叩いてやりゃいいんだよ」お婆さんは両切りの煙草を口にくわえてマッチで火をつけた。
「煙草もいいけど火事には気をつけなよ。燃やしちゃ終わりだよ。何度も言うようだけど・・」
手に持った紙袋を、かばんに入れると、男は眩しげに風鈴のほうを見た。その時、店の前を一人の若い女性が横切るのを、その男は瞬きするのを忘れるほど見つめていた。

「若い娘を見ると皆、自分の娘に見えてしょうがないよ」男は苦笑いしながら振り返り、手に持っていた向日葵の絵の麦わら帽子を頭にのせて、ゆっくりした足取りで店を出て行こうとした。ところが何を思ったか振り返り「これ今日は止めとくよ」男は都コンブの入った紙袋を前に出した。
「どうしたんだよ。毎日買ってるのに・・・嫌がらせかい」手を出し

たお婆さんのシワが笑っていた。
「わからないけど今日だけは買わずにいるよ」男は申し訳なさそうに頭の帽子をさわった。そしてゆっくり歩き出した。
「まったく、この売り上げを毎日の煙草代の足しにしてるのに」
「返してくれなっくてもいいよ。煙草代に使えばいいんだよ」
「いいのかい、最近は大きなショピング何とかが出来て、誰もこんな店で物を買わないんだよ」お婆さんは顔の奥のほうで目を細めて男の帽子に目をやった。
「見かけない帽子だね」お婆さんの声が後から聞こえた。
「押入れを整理してたら出てきたんだよ。こう暑いとさ・・・」男は立ち止まって振り向いた。
「押入れの整理じゃなくて心の整理をしなよ。会うのが怖いなら、さっさと忘れちゃいな」お婆さんは煙草をくわえて気持ちよさそうにクシャクシャな顔をして煙をはきだした。
「忘れちゃいな、はいいけど。煙草の火を消し忘れちゃだめだよ」男はお婆さんを見て笑いながら外へ出て行った。

涼しげな風が男の身体をかすめていく。男の視線は遠い彼方を見ているようだった。線路沿いの道を、ゆっくりと歩く若い女性のシルエットを見つめながら、杖を突いた男はその反対の方向に左足をだし右足を引き寄せながら、歩くことが全てなんだと悠久の時の中を人の何倍もの時間をかけて生きているんだと主張しているかのようにゆっくりと歩を進めた。
葉子は駅のプラットホームにぼんやり立っていた。此処に来てこれで良かったのかと思う気持ちと、まだわだかまる気持ちが交叉した。でも父を訪ねたその事は決して偽りではなかった。父に会えなかったが、思いは伝わったはずだと葉子は思いたかった。
電車が音を響かせて入ってきた。ドアが開いて車内の人となった葉子はそのままドアのところにもたれると、今歩いてきた道を窓越しからぼんやり眺めていた。電車はガッタン、ゴットンと走り出し

た。始めはゆっくりと景色は流れていた。徐々に電車のスピードが上がるにつれ景色は飛ぶように流れていく。それは突然、葉子の目に飛び込んできた。駄菓子屋の近くの線路沿いの道だった。杖に支えられて左足を出し地面をこするように右足を引き寄せながら歩いている向日葵の絵の麦わら帽子を被った一人の男の姿が。

「・・・・！」葉子の口が微かに動いた。涙とは言えない一筋が頬をつたった。それは現実か幻想かも分からぬまま、風景の一部となって振り返る間もなく後方に消し飛んで行った。

男の横を電車がガタゴトガタゴトと通り過ぎて行く。さっきの女性を探しているかのように男の顔が電車を向いた。電車のドアの女性が一瞬、男に視線を送ったのが見えた。男は瞬く間に去っていった電車を何時までも見ていた。これがこの世の見納めと言わんばかりに、大きな穴の開くほどに。

男の歩みの遅さに比べ、電車が去るのは速い。

男は歩くのを忘れ、独り言を呟いた。「又いつか、来るだろうか」そして男はゆっくり歩を進めてゆく。

ジリジリした暑さに男は額の汗を拭いた。自分の影を見つめて歩く男の歩みは止まらない。

夏の風は気まぐれで、その男の頭から向日葵の絵の麦わら帽子を吹き飛ばした。小さな帽子の影が流れる。男の視線があわてて前を見た。

少し離れたところに一人の若い女性がその麦わら帽子を手に持って立っていた。

男の目がその姿を見つめたまま動かない。

蝉の声がうるさいほど鳴いている。横をラーメン配達の自転車が通り過ぎて行った。砂ほこりが舞った。

「葉子・・・・？」かすかに男の口が開いた。

若い女性はゆっくり近づいてくる。
「お父さん・・・」私はもう決して逃げないとでも言うように、葉子のはっきりした声が聞こえた。そして向日葵の麦わら帽子を頭にのせた。
「葉子なのか？」
「葉子です・・・」
片桐二郎は言葉を忘れたかのように葉子を見ていた。
「お父さんとこれを一緒に食べたくて」葉子の手が開くと、その中には中野の都コンブがあった。それを前に差し出しながら葉子は父にもたれるように抱きついた。
「ごめんなさい・・・」
気まぐれな夏の風が吹いた。葉子の頭の麦わら帽子は風にあおられ空高く飛んでいった。そしていつしか見えなくなった。

葉子は暖かい気持ちに包まれながら、父の胸の温もりと頬に感じた涙の冷たさを心の中にとどめて、流れゆく車窓の景色を見つめていた。
「私はもう逃げない」葉子は何度も何度もつぶやいていた。

葉子は電車を降りると階段を登って行った。改札を通って長い通路を歩き再び階段を降りていく。あれ以来、葉子は階段を降りる時は必ず端によって、手すりを持ちながら降りて行くことにしていた。下り階段を見ると時々目まいをおこす事があるからだ。ただこの時も階段の上に立った葉子は下を見た時に、頭が一瞬真っ白になった。そして今にも崩れ落ちそうに階段の上で手すりにもたれかかってしまった。それでも真っ白に霧のかかった向こう側を必死に見ようと目をあけた。そしてその霧の向こうを葉子の目が微かに捉えた。心の中で消えかかっていたその人が白い霧の中で葉子を待っていた。葉子は半信半疑で小さく手を振った。そして階段の下で、三度の飯よりも葉子が好きな、鯨島学が大きく手を振るのが見えた。葉子は

嬉しさの為にしばらく動けなかった。頭の中の霧が晴れ、全てを過去に置き去りにして行ったように、もう階段なんか怖くはなかった。葉子は手すりを持つことなく、そのまま階段を走るようにかけ降りて行って鯨島学の胸の中に飛び込んだ。そして今度は鯨島の手を強く握って決して離さなかった。これを離せば地獄に落ちるとでも言いたげに。

時は、風のように全ての人の思いを大きな入れ物に入れて無雑作に流れていく。二人の横を通過していく電車が思い思いの人々を乗せて、ゴトンガタンとゆっくり走り出していったように。

時は風のように（後書き）

思ったより長くなってしまいました。
最後までたくさんの人に読んでいただきまして有難うございました。
評価、感想などありましたらよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4305f/

あの日の父の歩みのように

2010年10月8日15時10分発行